

## 日本女性学会創立 20 周年記念春季大会

1999年6月26日(土)・6月27日(日) 会場：城西国際大学

千葉県東金市求名1

### — プ ロ グ ラ ム —

|      |             |                       |
|------|-------------|-----------------------|
| 第1日目 | 13:30～16:50 | シンポジウム「20世紀の女性表現を考える」 |
|      | 17:00～18:20 | 定例総会                  |
|      | 18:30～20:30 | 懇親会                   |
| 第2日目 | 10:00～12:00 | 個人研究発表                |
|      | 12:00～13:00 | 昼食(会員懇談会)             |
|      | 13:00～15:00 | ワークショップ               |

第1日目：6月26日(土) 13:30～16:50

### シンポジウム：20世紀の女性表現を考える

パネリスト 水田 宗子(フェミニズム批評・城西国際大学)  
萩原 弘子(西洋思想史・大阪女子大学)  
阿木津 英(歌人)  
コーディネーター 小林富久子(アメリカ文学・早稲田大学)

コーディネーター 小林 富久子

21世紀を目前に控えた今、私たちは20世紀全体をさまざまな角度から俯瞰的にとらえうる地点に立っている。このシンポジウムでは、過去1世紀のあいだ女性表現がいかなる成果を生み、いかなる問題に立ち会ってきたかを、集中的に考察することで、来るべき21世紀の状況を占ってみることも狙いとしている。20世紀を振り返るとは、当然、近代全体を振り返ることに繋がる。この間女性は確実に新しい表現ジャンルの開拓者として多様な作品を世に送り出してきた。特に近代日本文学の分野では、女性表現を抜きにしては語りえないほど実り多い成果を生み出している。だが、一旦目を脱近代ともいわれる今日の状況に転じる時、必ずしも全面的にバラ色とは言えない事態も見られる。たとえば、絵画等の視覚表現

の分野では、今世紀末に至ってとくに顕著となった技術革新やマス・メディアの発達の結果、女性の新たな客体化・周縁化という傾向も見られる。さらに短歌など一般の日本女性が多数参加する表現分野に目をやると、マス・メディアに乗れば乗るほど、つくられた紋切型としての「女性性」が強調されがちとなるといった現象も見られる。

今回パネリストとして各分野で刺激的な仕事をしておられる3人の方々をお迎えできることは大きな喜びである。うち水田さんには文学と映像、萩原さんには視覚表現、阿木津さんには短歌を扱っていただくが、その後フロアの皆さん方とも活発な論議が展開されるものと期待している。

パネリスト

## ◇近代女性表現の軌跡

水田 宗子

近代の女性の自我と自己意識は自立した人間を希求する個人志向と、産み育てる性をアイデンティティの根拠とする母性志向の二つの極を持ちながら展開した。近代産業社会への参入は、この二つの志向を二律背反なものとし、女であることの矛盾として、女の自己意識を分裂させた。それは近代女性表現における女性のナラティブが「女語り」でも、「私語り」でもない、「自己語り」を志向したことに鮮明に現れている。近代的自我と主体性を持つ個人を志向する近代女性たちは、国家や共同体のナラティブ、とりわけ、「女という物語」に違和感を持ち、そこからはみだす自分の姿を可視なものとする個人的なナラティブを模索した。それは共同体のマスターストーリーにくらべて小さい物語であることには変わりなくとも、歴史のなかにモデルがない「女としての個人」であるという意思表示としての自己語りであり、ナラティブであった。

同時にその一方で、女たちは共同体が作り出したマスターストーリーの「女という物語」を逆手にとりながら、ゴシック・ロマンをはじめとする家族の裏物語、自己表現の裏道としての物語を書くことを通して、男社会をなし崩しにもしてきた。自己語りを表面に出さず、祖母や母の夢や怨念を託した一見インパーソナルな語りも、複層的に分裂する女の内面を物語の空間とし、家父長制家族を破壊しようとする、反物語としての女の語りである点で、女性の自己語りであることには変わらない。

近代産業社会への移行のプロセスで国家、市場、市民、家族、個人、母、女というアイデンティティのあらゆる根拠から疎外された女性は、その自己矛盾を内面化することを通して、現実と多元的に関わる視点と方法を体得してきた。それが近代女性表現に見られる女の生き残り志向である。一方では勝ち目のない近代化の矛盾との戦いに立ち向い、他方では生き残りを志向する想像力を養った女性表現は、最も核心をついた近代批評となってきたと同時に、新しいジャンルや表現領域を開拓して、近代表現を進展させ、それなくしては近代表現を語れない一つの核を作り上げてきた。

日本と主に英米の女性文学に例をとりながら、女性たちが開拓してきた表現の軌跡と、女であり個人であることの探究をとおして、女性表現が性差文化の構造をゆるがせてきた軌跡を辿りたい。

## ◇《女の表現》が格闘してきたこと

萩原 弘子

女性表現者の表現活動を取りまく障害をいくつかあげ、それらが世紀末の現在もまだ過去のものとなっていないことを論じる。また新しい障害の様相にも言及したい。私がよく知るのは視覚的表現の分野における女性表現者

の仕事だが、問題の多くはどんな表現の分野にも共通して見られるのではないかと思う。阿木津英さん、水田宗子さんとのシンポでそういった点が明らかになればと期待している。

さて女性の表現活動を取りまく障害としてあげるべきことは多いが、ここではシンポの場で話すことの一部を箇条書き的に並べておくにとどめる。第1に、表現の主体として立つに必要な知識や技術を教える教育の場で行われてきた、さまざまな程度やレベルの女性排除。第2に、女性の表現の無視とゲッター化（「女流」という囲い込み、「女らしい表現」という評論など）。第3に、表現の発表に関わる困難。第4に、表現の主体となることの困難と表裏一体のこととしての、表現された女性、表現に登場する女性像にまつわる諸問題。第5に、女性の表現を考えると見落としがちな、階級的、人種的な違いについての視点の重要性。以上、いずれの論点も、表現活動の継続を難しくする種々の制度的な壁を明らかにするためのものである。

## ◇歌とフェミニズム—短歌創作者としての立場から

阿木津 英

歌は、日本語及び日本文化の歴史から切り離しては語れない。あらゆる言語は特殊なものだが、なかでも日本語の中樞神経に位置するともいえる歌の特殊性は、戦前までの近代国家によって利用される一方、散文の時代といわれる二十世紀にあって困難を抱えてきた。しかし、物語文学とともに女性が深くかかわってきた歌というジャンルは、明治の与謝野晶子・山川登美子など明星派の女性歌人たち、また敗戦後の多数の女性歌人の登場など、政治や社会の抑圧がゆるむとき、いちはやく女性が台頭する詩型でもある。今や、どのような短歌の会においても八割方を女性が占め、多くの女性歌人が活躍しているが、しかし、それにしては全体を見渡すとき、何一つ進展していないように思える。近代女性短歌の成果といえる「母性」と「恋愛」——従属的補完的存在としての女性の歌——の縮小再生産を、相も変わらず行っている。

このシンポジウムでは、わたしは短歌創作者としての立場から、自らの課題とし、考えてきたことを提出してみたい。たとえば、わたしは、〈女〉というカテゴリーを疑い、そこから逃れようとして、女性性・女性原理を問うたのに、なぜ〈女〉にこだわるものとして押し込められてしまったのか。また、水田宗子さんのいう「自己語り」と関連すると思うが、「一つの顔をもつ」ことの限界。さらに、歌がもつメッセージ性の限界。これは、萩原弘子さんの視覚表現における様式の問題と関連しよう。とても楽しみにしている。

## 個人研究発表

### ◇オーストラリアの高齢福祉について —シドニーと日本の場合—

福井 浅子

平成10年8月末から9月上旬にかけてシドニー工科大学の研修の中から得た、リタイアメント村での高齢者の実情や、ガン末期の方々が療養しておられるホスピス等の状況からの教訓を基にして、千葉県東金市や、東京都調布市の例をあげて、高齢者介護と医療の諸問題を探究する。

### ◇『ジュニア小説』における言説の制度と 読者共同体

金田 淳子

『ジュニア小説』とは、女子中学生・高校生という新しい購買層向けに1960年代に誕生した通俗文学ジャンルである。当初このジャンルは大人向けのジャンル出身の男性作家が生産の主流を占め、読者である女性を教育の客体、とくに1970年代頃からは性教育の客体とみなすものであったが、1980年代頃からはこのジャンルからデビューした10代から20代の女性作家が主流となり、読者である女性をジャンルの担い手とみなすものへと変貌した。

### ◇ゲイ/レズビアン identity と language

阿部 秀子

言語学上、ゲイやレズビアンを「想像された」一つのグループとして認識するにはいろいろな問題がある。しかしFergusonが言う言語の3領域(dialect, register, genre)を使えば分析の可能性はある。それは、ゲイ、レズビアンだから「特別」な言語を使うだろうという前提ではなく、自分のゲイ、レズビアンとしてのアイデンティティーがどのコンテクストでより明白に「表現」されるかを焦点とする。この発表は、英語におけるゲイ、レズビアンの言語の研究の出発点、ならびにその問題点を探ることにより、社会言語学の新しい分野としての「ゲイ、レズビアン言語学」の展望を分析するものである。

### ◇シンガポールにおける慣習上の婚姻形態と 女性憲章制定の意義 —女性の地位はどこまで向上したか—

清末 愛砂

19世紀初頭にイギリスの植民地となったシンガポールでは、1961年に統一した婚姻法である「女性憲章」が制定されるまで、少なくとも7つの婚姻制度が存在していたといわれており、その中では一夫多妻婚も行われていた。「女性憲章」の主な制定目的は、植民地下で認められてきた一夫多妻婚の廃止にあり、それによって女性の権利を「保

護」し、女性の地位向上を目指すことにあった。現実には「女性憲章」がシンガポールの女性の地位向上に繋がったのかどうかについて発表したいと思う。

### ◇女性障害者運動の生成と展開

瀬山 紀子

障害を持つ女性たちは、障害者運動と女性運動の間で、自らを肯定する言葉を多数生み出してきた。その活動は、旧優生保護法から、優生条項をなくするための大きなちからとなった。しかし、現在も胎児条項が検討されるなど、優生保護法が過去のものになったとはいええない状況が続いている。そのような状況をふまえながら、現在、自立生活センターを中心にして行われているピア・カウンセリングに至る彼女らの活動の軌跡をたどり、その実践が持つ意味を考えてみたい。

### ◇当事者が語る不妊の悩み

松島 紀子

子どもが欲しくても出来ないこと自体、プライベートなことであり、社会の中で問題提起するには困難であると思われる。しかし、子供が産めないことで、精神的困難を抱え、この状況を分析した時、困難を引き起こす要因に「女は子どもを産むのが当たり前」という社会通念による抑圧により、このことが生活上の困難を引き起こしている。そのことを当事者の語りから明らかにした上で、不妊の定義を考えてみたい。

### ◇日本のレズビアン、その生の語りと主体構築 (*Queer Japan*, New Victoria Publishers, 1988 から)

渡辺 みえこ

日本の性指向マイノリティーの自己史が、アメリカで、アメリカ人フェミニストによって出版された。そのなかの30歳代から70歳代、6人のレズビアンの語りの紹介と分析を試みる。

年齢や状況は違うが、みな長い孤独の探索の中で、「異常者」という自己の名に出会い、苦しみを抱いてその負のアイデンティティーを受け入れる。やがてコミュニティーに出会い、自己を認めていく。その過程で恋人の結婚による絶望や、相手の幸せのため自分が消えたいということによる自殺未遂などを経て、生き残ってきた女たちだ。異性愛中心社会の中で生きることの困難、仕事、結婚の強制など多くの問題が語られている。

## ◇魔女と山姥のジェンダー

### —『マクベス』における魔女表象の変容—

藤 瀬 恭 子

シェイクスピア産業の隆盛は、イギリス本国や英語圏ばかりか日本においても衰える気配を見せない。それは英文学の権威としてのcanonの力が再生産される場であるばかりでなく、芝居や映画の製作者たち、受容する側の文化的姿勢が反映される場に他ならない。女性嫌悪の

劇『マクベス』に登場する魔女は、老婆から若い官能的な女まで、様々な姿を見せている。ここではオーソン・ウエルズ、ロマン・ポランスキー監督の映画『マクベス』における魔女表象、それにマクベスの翻案劇である黒沢明監督『蜘蛛の巣城』の山姥という魔女表象を比較し、背後の神話を分析することで、魔女とマクベス夫人のセクシュアリティにせまり、女性嫌悪の集中する主題、魔女の文化史につなげたい。

第2日目：6月27日(日) 13:00～15:00

## ワークシヨップ

### ◇文学に現れた買売春

新・フェミニズム批評の会

岡 野 幸 江

小 林 とし子

「性」支配の典型である買売春をめぐる、近年、援助交際などの自由意志による売春は認めてもよい、あるいは売春は職業として労働権を保障すべきだとする議論が出ているが、セクシュアリティをめぐる論議の中でこの買売春問題は依然として未解決であると同時に、現在、最も中心的な課題になっているといえる。ここでは日本文学の中に買売春がいかに表現されてきたかをさぐりながら、今日私たちが「性」における自己決定の問題をどうとらえたらよいか考えてみたい。

### ◇「テクスチュアル・ハラスメント裁判」

#### についての報告

小 谷 真 理

中江川 靖 子

テクスチュアル・ハラスメントとは、文章上での性的いやがらせを指します。女性が自分自身の名前で作品を発表したり、何かしらの創作活動に関わった場合、「それは彼女自身が書いていない、身近にいる男性の手によるものだ」、あるいは「女が書いたのではない、男が書いたに決まっている」と揶揄すること……これは「女性がひとりでは創造的なことなど何もできない」とする、古来から女性たちが比較的頻繁に受けてきた誹謗中傷の典型であり、その背後にはそれを類型表現とも気づかないほど深く根づいた女性差別意識があるものと推測することができます。

本発表では、現在東京地方裁判所で争われている平成10年(ワ)1182号民事訴訟、通称オルタ事件の経過、サポートグループ「女性の著作権を考える会」の活動、そして本件におけるテクスチュアル・ハラスメントの意義についてご報告したいと思います。

### ◇アメリカ・レズビアン詩(愛の詩)を鑑賞する

富 岡 明 美

今回のシンポジウムのテーマは「二十世紀の女性表現を考える」だが、アメリカの(そして日本の)レズビアン詩人も多くを表現してきた。しかしその多くを包括的に鑑賞することは時間の制限もあって不可能なので、今回はロード、グラーン、リッチ、ブルーマス等による愛の詩を読み・聴き、かの女たちがそこで何を表現しているのかを参加者全員で考えたい。なお、中心となるのはアメリカの詩人だが、吉原幸子のような日本のレズビアン詩人も取り上げたい。参加者による自作のレズビアン詩の朗読や好みのレズビアン詩の持参は大歓迎!

### ◇Feminist Expression

#### — A Cross-cultural Perspective —

Suresht R. Bald

Zhang Lee

大 橋 稔

林 千 章

藤 本 秀 行

The first three papers analyse women writers from China, US and Egypt respectively to identify and discuss the issues that inform feminist discourse in these different cultures/countries. Fujimoto's paper focuses on Japanese animation to discuss the "packaging" of female heroine figures — their traits, both physical and intellectual — visions and goals and suggests the implications of such construction in animation.

# 日本女性学会からのお知らせ

## ■『女性学』購読拡大のお願い

会員には会費に含まれている学会誌『女性学』です。密度の高い情報が入っています。これを会員各自の努力で、さらに広く読者を開拓しましょう。学会20年目で学会誌も定期刊行が軌道にのりました。しかし実はあまり読まれていません。学会の存在もまだまだ知られていません。ジェンダー論、女性学等の教育、研究者は増加していますが、購読者は増加していません。その理由の一つに、広報の不足があります。そこで会員の皆さんに以下のことでご協力をお願いいたします。

- 1) 各種研究会、関連学会、集会以『女性学』最新号を見本として持参し、購読者募集の用紙(ニュースレターに同封)をつけて広報してください。購読者用紙に氏名、住所まで記入していただければ、後は事務局で購読登録、本送付、代金請求等はいたします。
- 2) 学会誌の広報チラシ(これも同封)を各自刷り増しして各大学、社会教育施設、図書館等に置いてください。友人、同僚等に紹介してください。
- 3) 10冊販売毎に1冊無料でさしあげます。
- 4) 論文等掲載した方は10冊をお買いあげいただくことをお願いしています。
- 5) 勤務先大学、短大、専門学校、女性センター図書館、公立図書館などで、まだこの学会誌が購読されていない場合は、購読要請を図書館にだしてください。

日頃大会などにご参加いただいている会員、あるいは参加出来ない会員の方々、是非、学会をこうした側面から応援してください。学会会員は増加しています。しかし会計は常に厳しい状況です。ご協力ください。他に購読拡大の方法のよいアイデアがありましたら、事務局にご一報ください。また詳細不明なことがありましたら、いつでも学会事務局に電話かFAXをください。

本学会の情報は、日本学術会議ホームページ(<http://www.scj.go.jp>)の中にも掲載されています。  
(文責：國信)

## ■日本女性学会学会誌『女性学』Vol. 8

### 編集委員募集

現在、学会誌7号編集委員会は、今秋の発行に向けて編集作業を進めています。学会誌の年報化も軌道にのり、来年度発行の第8号の編集委員会を春の総会でスタートさせます。参加希望者は下記の要領でご連絡下さい。

編集委員会は、秋の原稿募集に始まり、3月に原稿を

締切り、その後編集作業に入りますので、来年春から秋にかけての編集作業に参加できることが条件です。なお、編集委員は公募論文の執筆者にはなれません。

記

1. 募集期限：1999年5月30日
2. 連絡方法：葉書、またはFax

## ■研究会報告

### 「日本におけるヘテロセクシズムと女性の状況」

3月14日、大阪女子大学にて行われた研究会は、会員、非会員合わせて15名ほどの参加を得た。服部亜矢子さん(「東海レズビアンニュースレター」元連絡係)より、日本の異性愛至上主義の仕組みとその問題性を、結婚制度、女性の労働・経済状況、メディアにおけるレズビ안의周縁化などの諸点に言及しながら、明らかにする発表がされた。女性より男性を重んずる姿勢を女性に強制する有形無形の制度が存在することについて改めて考えさせられ、またセクシュアリティの問題を、狭い意味で性的な好みの問題とのみ捉えることの誤りにも気づかせられた。参加者討論でも、有意義な知見が提起された。社会変革の展望としては、個人を単位とする(個人のセクシュアリティに頓着しない)方向をめざすのがよいか、あるいは、現今の結婚特権のラディカルな拡大(それは転覆になる、だろうか?)をめざすべきか、といったことも討論のなかで考えさせられた。(萩原 弘子)

### 大学におけるセクシュアル・ハラスメントの取り組みに関する資料

- (1) セクシュアル・ハラスメント防止ガイドラインのチェック項目と解説
- (2) セクシュアル・ハラスメントに関するブックレット『大学の責任』『法』『ガイドライン』(近刊予定)

■研究会のお知らせ

Janice Radway (ジャニス・ラドウェイ) さん講演会

テーマ: Girls: Reading and Writing Their Own Lives

(ガール—その生を読み、書く)

日時 1999年6月7日(月)午後6時半～9時

場所 ウィングス京都

京都市中京区東洞院六角下がる

ラドウェイさんのプロフィール

米国デューク大学文学部教授。専門分野はカルチュラル・スタディ。アメリカ学会会長。

主著書

※A Feeling for Books: The Book-Of-The-Month Club, Literary Taste, and Middle-Class Desire,1997

※Reading the Romance: Women, Patriarchy, and Popular Literature, 1991

■会員の最近の著作

◎楠瀬佳子

『ベッシー・ヘッド 拒絶と受容の文学

—アパルトヘイトを生きた女たち』

(第三書館 1999年2月 2500円)

南アフリカ出身の亡命女性作家の評伝。アパルトヘイト時代を生きた一人の女性の人生をたどりながら、南アフリカの女性が置かれた状況を紹介します。人種差別と性差別と闘った女の記録。

日本女性学会創立 20 周年記念春季大会

会 場：城西国際大学 千葉県東金市求名 1

日 時：6月26日(土)・6月27日(日)

城西国際大学での大会に参加される方は、次の点について、ご注意ください。

☆予約は、日本女性学会として一括して受け付けます。6月12日までに、日本女性学会事務局まで、住所、氏名、電話、以下のどれが必要かを記入し、ファックスでお申し込みください。

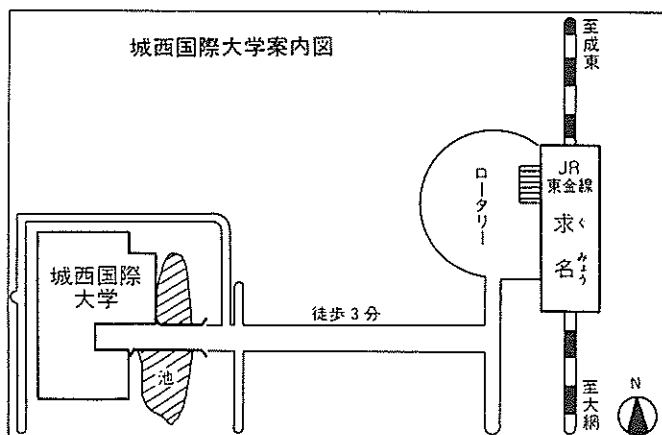
(1)26日宿泊 ホテル 数10名 8000円 (大学から送迎バスが出ます。前泊希望の方はその旨も記して下さい。)

(2)26日夕方 懇親会 3000円

(3)27日の昼食 600～700円程度です。近所に飲食店はありません。

☆書籍販売のコーナーも設けます。販売希望者は、各自が責任を持って販売を行なってください。事前に書籍を郵送される方は、城西国際大学・日本女性学会大会準備室気付けでお送り下さい。(住所：千葉県東金市求名1)

☆現地への交通手段は、別紙の案内を参照してください。スクールバス・臨時便も出ます。



- JR東金線「求名」(ぐみょう)駅下車徒歩3分
- 千葉東金有料道路「山田」インターチェンジより車で15分

